

大槌の津波

# 大槌の津波

TSUNAMI in OTSUCHI

平成23年3月11日

3.11/2011

その記録、そして出会った人々

植田俊郎

植田俊郎  
Toshiro UETA



# 大槌の津波

TSUNAMI in OTSUCHI

平成23年3月11日

3.11/2011

その記録、そして出会った人々

植田俊郎

Toshiro UETA



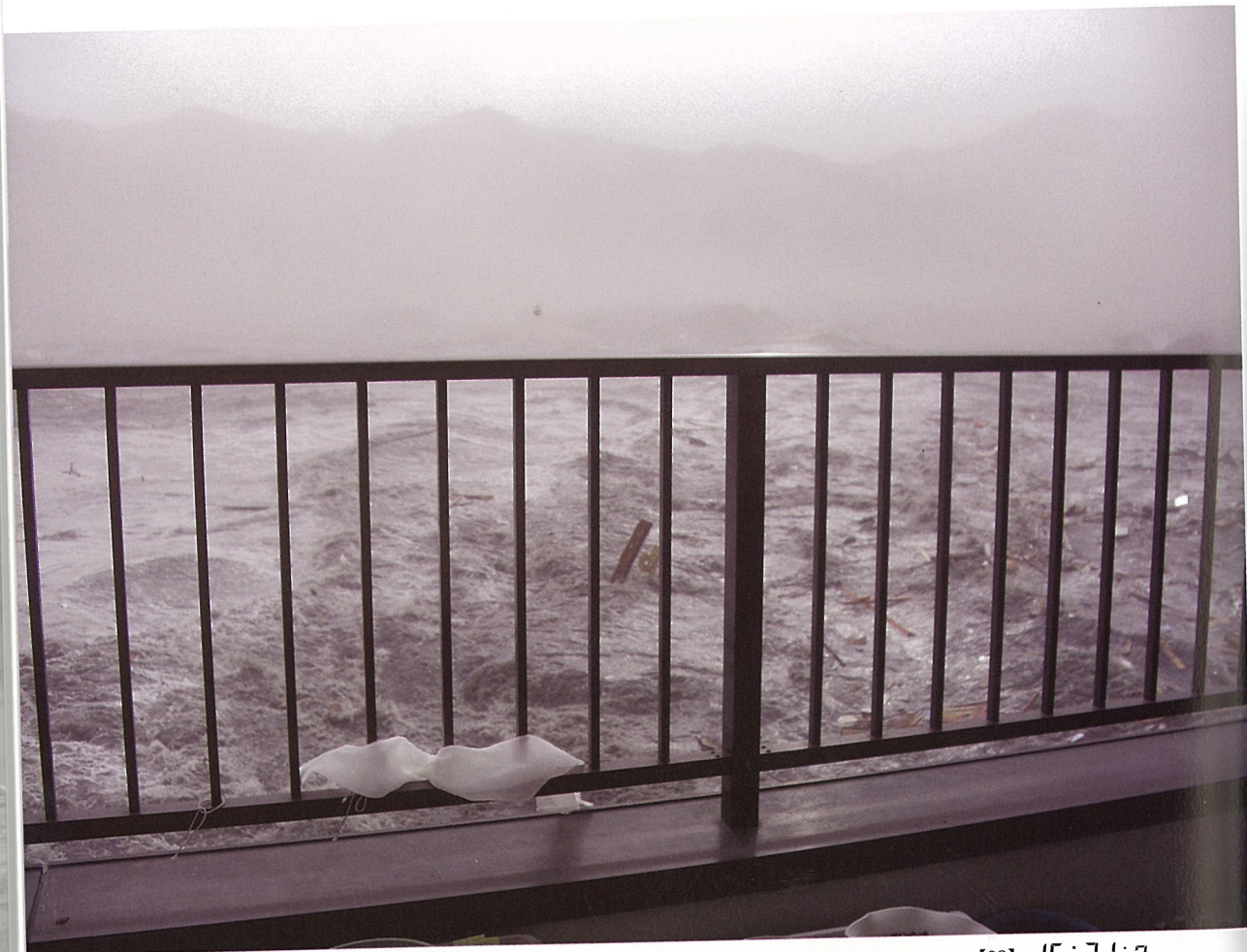
この本は平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災大津波の写真と一部震災前の写真で構成したものです。





[01] 3.11/2011 15:21:7



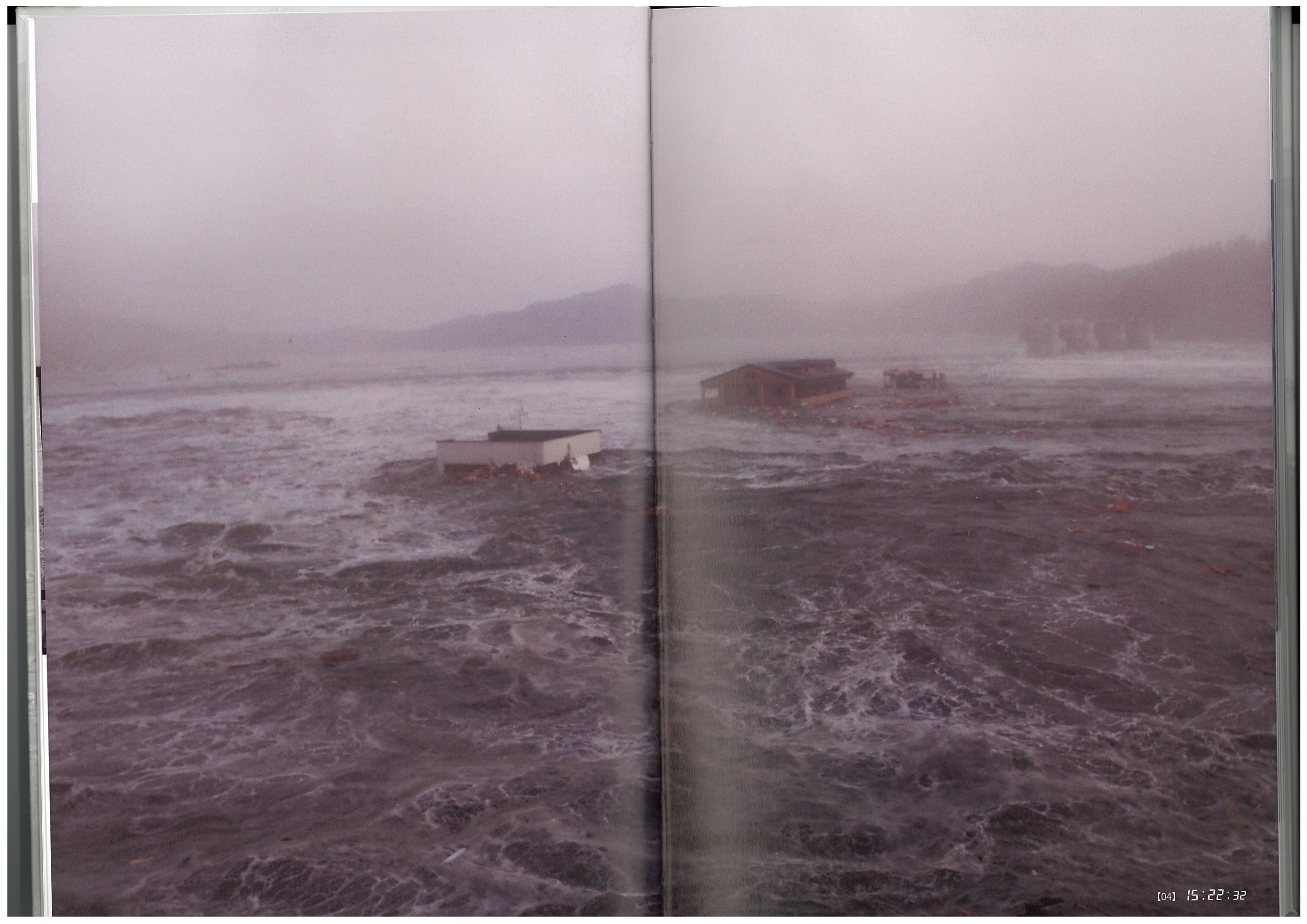


[02] 15:21:7



[03] 15:22:02









[05] 15:22:48



[06] 15:23:08



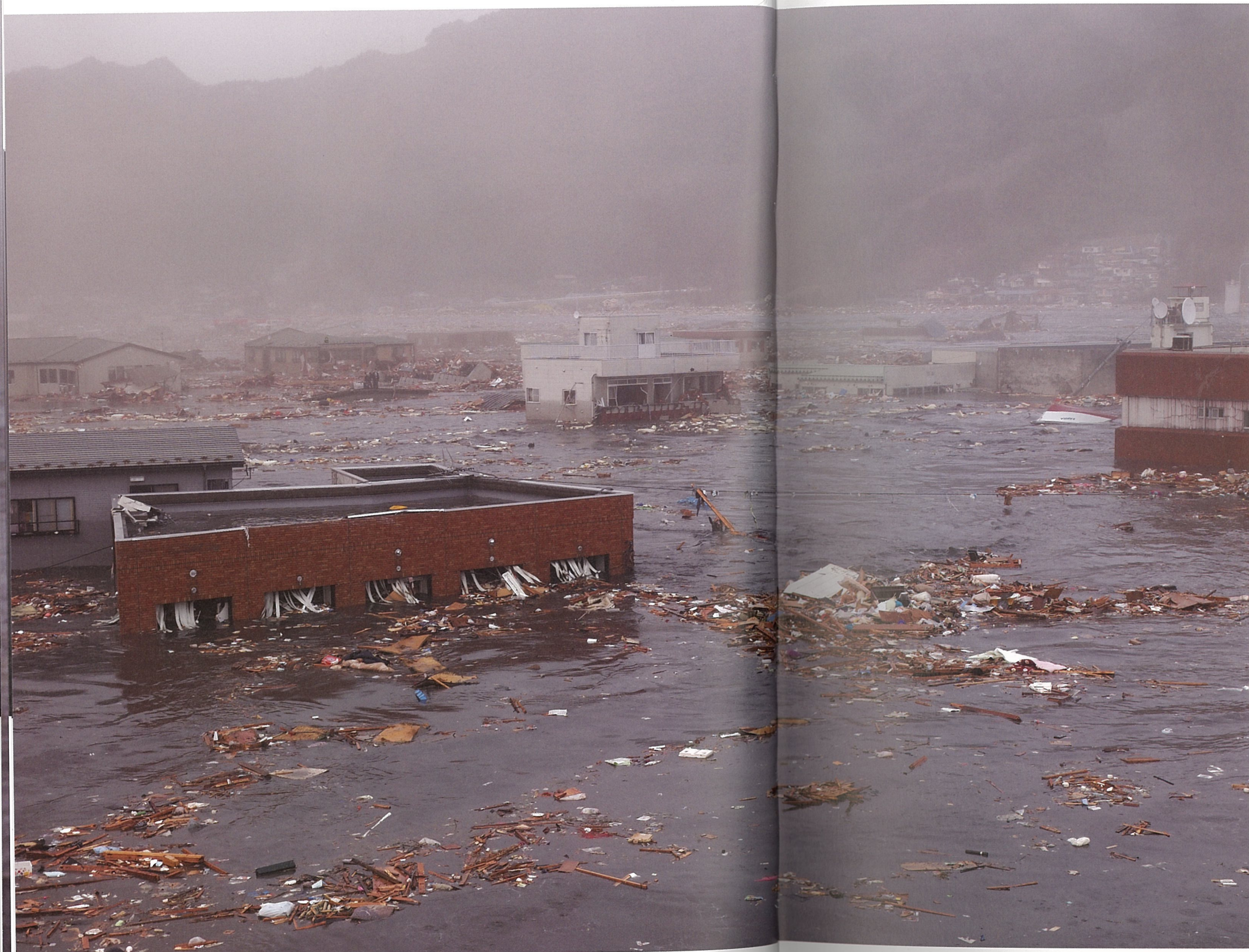


[07] 15:23:38



[08] 15:24:18





[09] 15:24:44









[11] 15:25:32

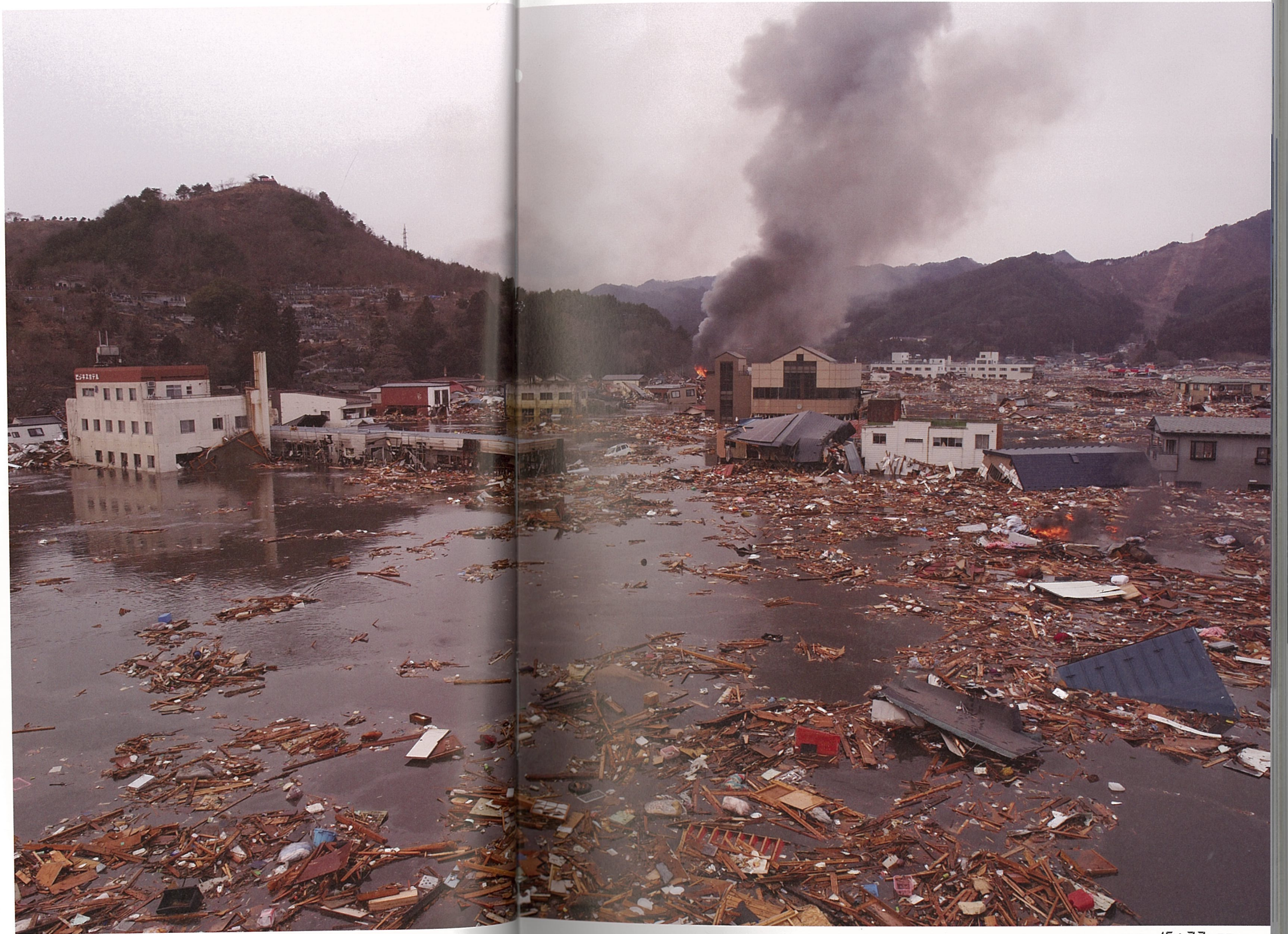


[12] 15:31:12



[13] 15:31:50









[15] 15:51:22



[16] 16:07:22





【17】



【18】



【19】 17:17:44





[20] 17:45:26



[21] 17:46:24





[22] 19:34:30



[23]









【25】 3.12/2011 05:37:18



【26】 1.1/2011 〈震災前〉





[27] 3.12/2011 05:38:30



[29] 05:39:12



[28] 05:40:56



[30] 09:17:48

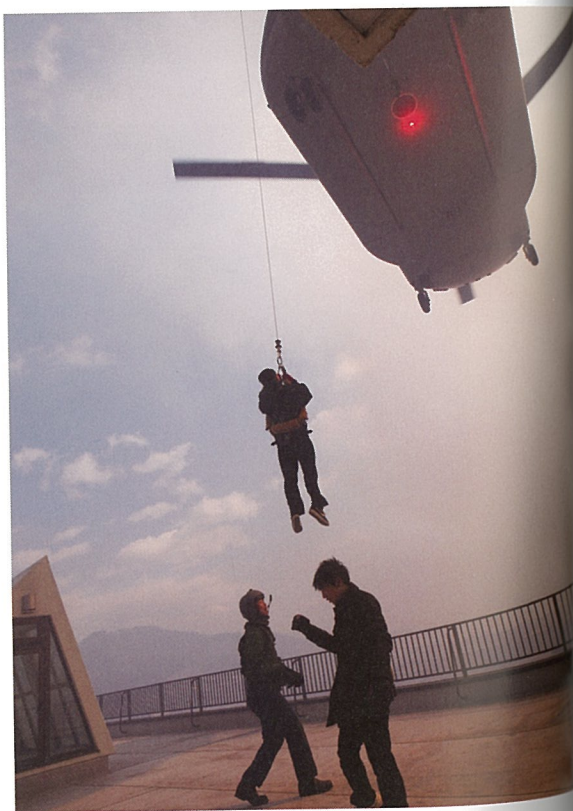




[31] 09:29:12



[32] 10:33:56



[33] 11:37:36



[34] 10:45:30





[35] 11:41:42





【36】 3.14/2011



【38】 3.14/2011



【37】 4.26/2011



【39】 8.8/2011





【40】 7.18/2011



【42】 6.28/2012



【41】 5.5/2007 <震災前>



【43】 1.8/2004 <震災前>





【44】 2.5/2012



【45】 4.11/2009〈震災前〉





【46】 5.13/2011



【47】 7.26/2011



【48】 5.5/2007 <震災前>





【49】 4.5/2011



【50】 5.5/2007 〈震災前〉





【51】 1.22/2012



【52】 1.1/2011 〈震災前〉





【53】 4.5/2011



【54】 8.10/2011



【55】 1.14/2010 <震災前>





【56】 1.24/2012



【57】 2.26/2012







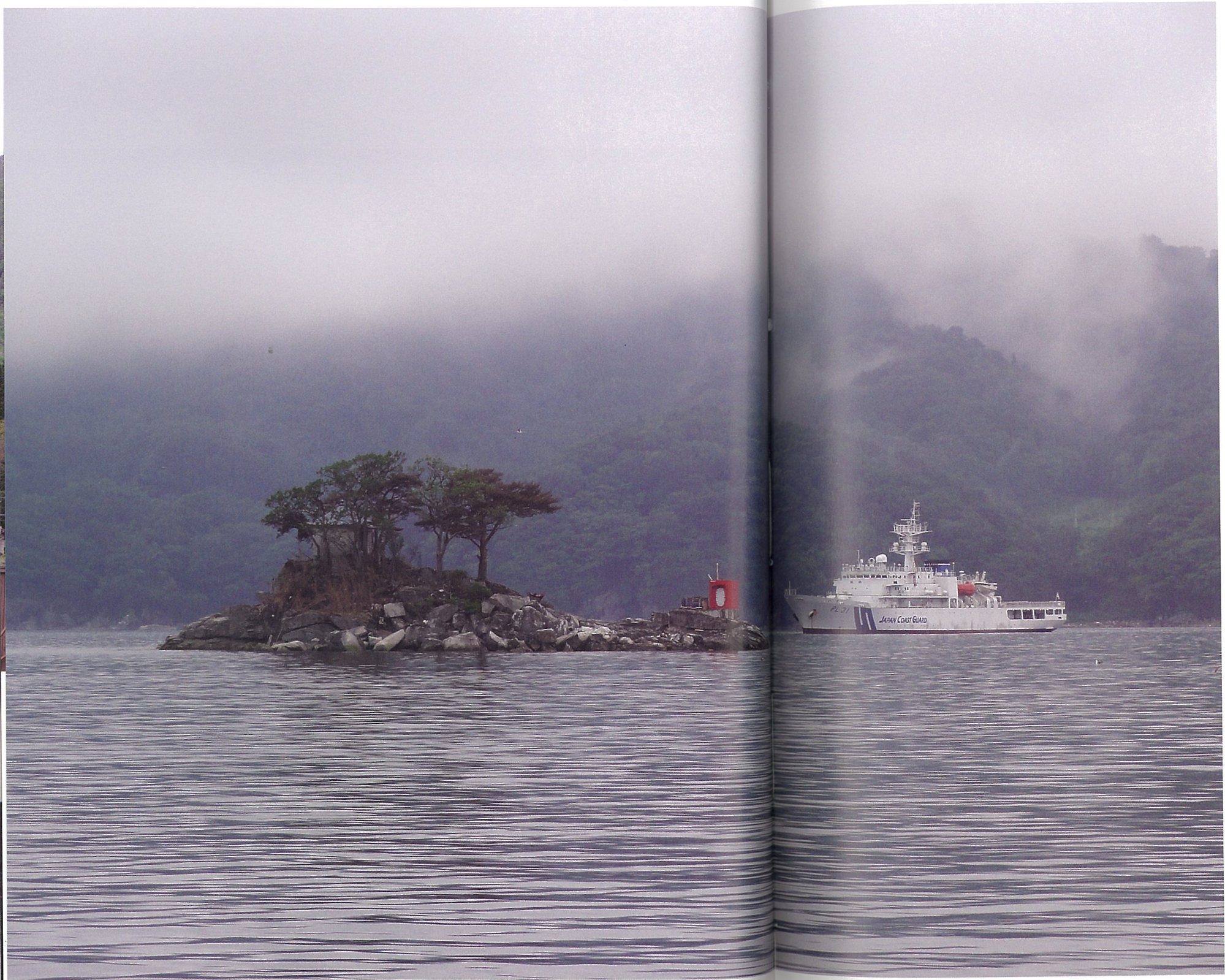


[59] 5.10/2012

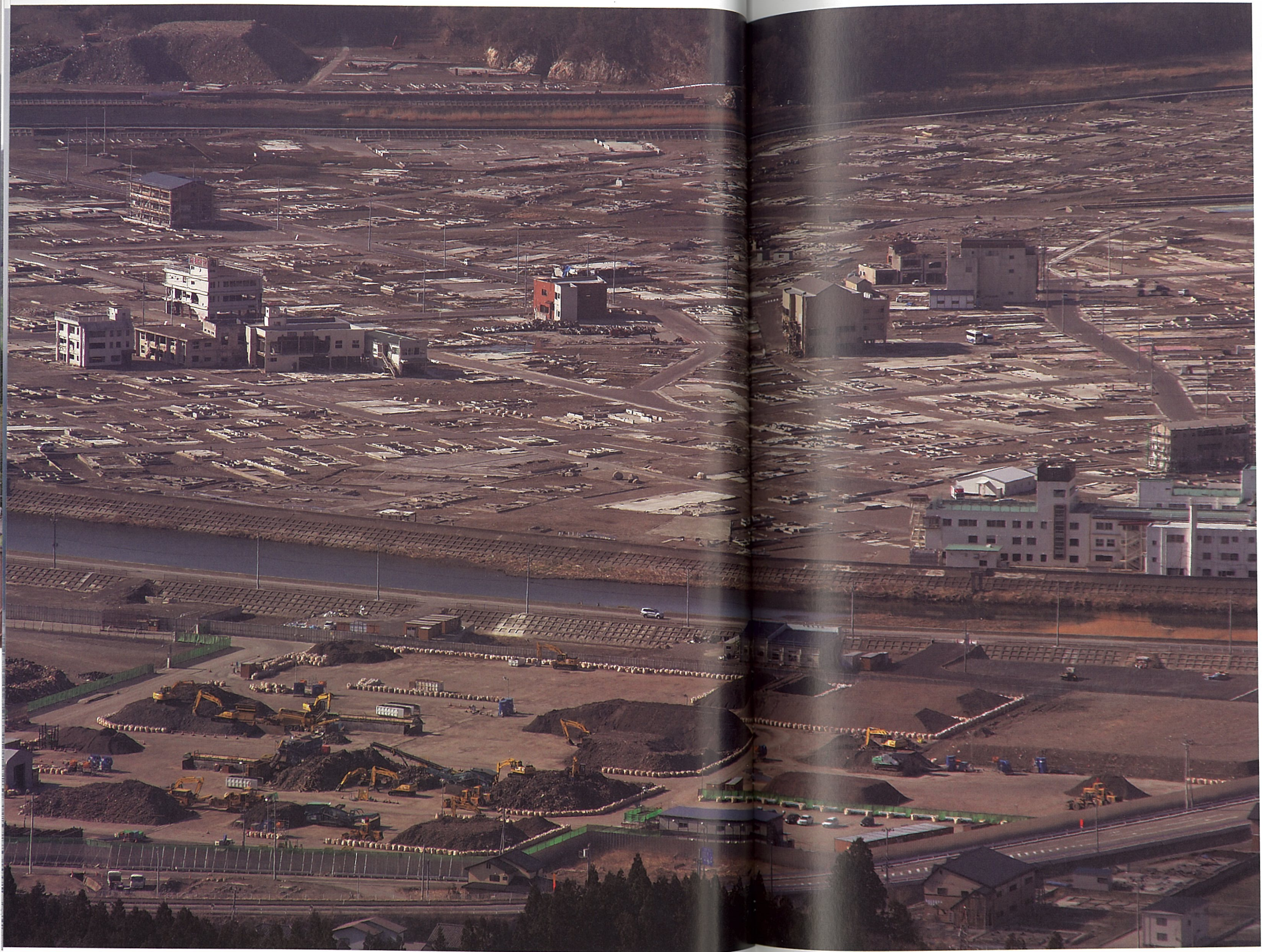


[60] 9.7/2011













【63】 4.21/2011



【64】 8.5/2011





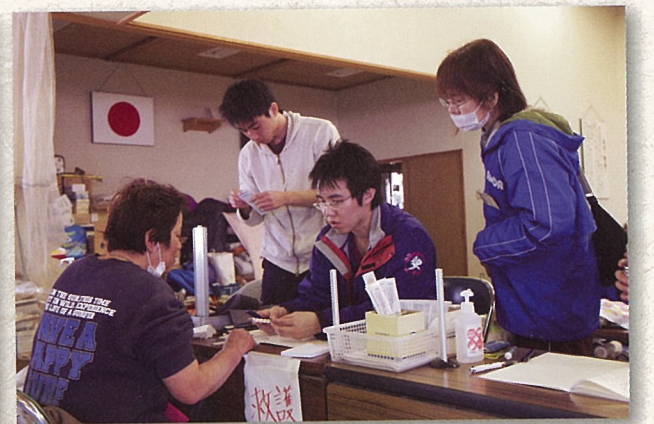
【65】 7.22/2012

出会った人々

















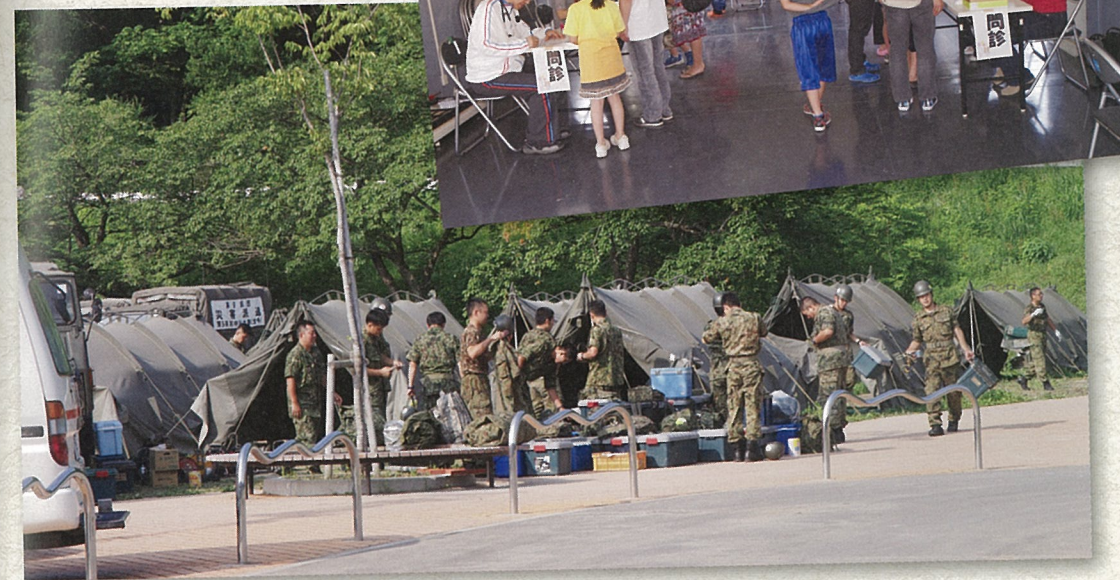




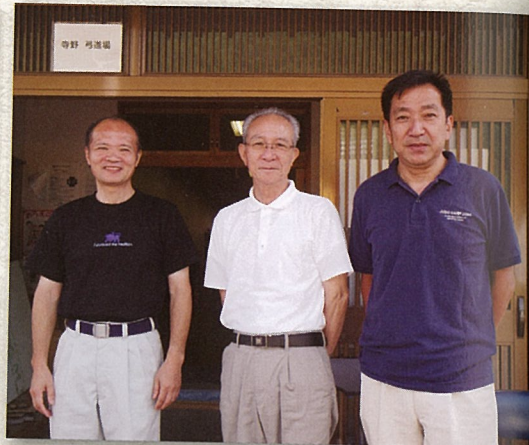




























記  
録



# 記録

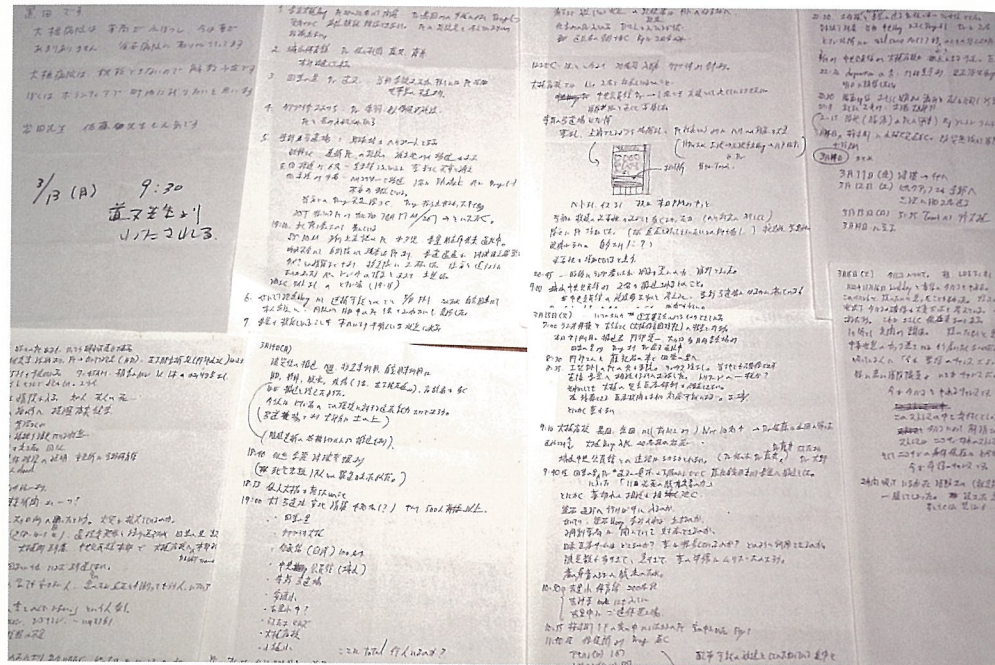
## ◇はじめに

避難した寺野弓道場にあったA4のコピー用紙に綴った記録をまとめてみました。平成23年3月11日から3月18日の長崎大学医療支援チーム来訪までの記録です。大学山岳部時代の山の記録のように、時間の経過を追ったメモや、思うままに書いた文章です。

## ◇3月11日(金)

いつものように2時からの午後の診療が始まっていた。ある患者さんの血圧を測っているときに地震が起こった。これまでに体験したことがない長く大きな揺れだった。「いつもとは違うね。」と患者さんに声をかけ、来院していた他の患者さんと職員に帰宅を促した。私は3階の自宅へ上がり母、妻と共に室内を点検していた。外が騒然としている中、「須賀町でおばあさんが倒れている。」という女性が医院に飛び込んできた。医院に留まっていた職員の連絡を受け、私はその女性の車に同乗し現場に急行した。看護師も救急器材を抱え小走り現場に駆けつけてくれた。幸い症状は軽く、同じ女性の車で避難所への搬送をお願いし徒歩で医院に戻ることにした。途中避難を躊躇するご近所の老女を、避難途中の車を止めて乗せたりして医院玄関前に帰ってきた。そのとき医院周囲を点検していた妻が「水が見える。」と言うのである。「まさか…。」と思いながら隣の農協職員、社会福祉協議会職員と共に階段を登った。その途中自宅4階の窓から見た景色は、白い空間が広がっているばかりで何が起きているか理解できなかった。しかし危険を感じ屋上まで達したときに見た周囲の状況は、まさに忽然と海の中に立っている我が医院であった。黒い波が渦を巻き、瓦礫、家が沖へ流れていく光景は悪夢のようであった。そして第二波と思われる黒い帯状の波が押し寄せてきた時に母がつぶやいた。「私達だめかもしれない…。」

幸いにして津波は屋上までには達することはなかったが、4階屋上からの惨状を目の前にし、皆言葉少なげであった。私達家族3名、従業員5名、花巻農協職員8名、大槌町社会福祉協議会職員2名の計18名がこの屋上に取り残されていた。いつの間にか夕闇が迫り風と雪がちらつき始めた。このため津波被害を免れた4階の和室(6畳と8畳の続き間)に全員で移動した。この階は家族の寝室、風呂、トイレがある空間で、布団、毛布等の寝具、





また衣類も充分にあった。さらにこの階には山道具を収納している小さな部屋があり、ガスストーブ、ガソリンストーブ、コッフェル類、テント、山用の食糧等があり心強かった。その他ホワイトデイのために用意したクッキーやチョコレートもあった。水が引いた3階のダイニングキッチンからはジュース、ヨーグルト、カップ麺、お餅などを回収できた。残念ながら水の確保はできなかったが、ひっくり返った冷蔵庫の中から氷を取り出し、これをやかんにかけお湯も作ることができた。水が少ないだけで2日間程度はこの家で過ごすことができると考えた。山でのビバーク(緊急露營)を考えれば、これほど贅沢な環境はないからだ。和室の窓からは末広町方面の火災が見えたが、我が家まで火が迫ってくるような感じはない。私達夫婦は和室前の廊下にソファを移動し毛布をかぶりながら餅を焼いたり、お湯を作ったりした。私はすでに山登りの装備を身に付けており、下着から冬山仕様である。皆もダウンジャケット、コート、雨具、ウインドブレーカーなど適当に身に付けている。寒くはなさそうだ。何も怖くはない。「生きてやる。」と思った。

#### ◇3月12日(土)

静かな朝を迎えた。この朝の屋上からの光景は忘れられない。町が消失していた。あたかも湖面に瓦礫が散在しているようである。末広町と上町方面の火災も続いていた。そんな中、瓦礫の中を歩いている自衛隊員を見ることができた。すでに救助の手が到着しているのである。夜が明けるにつれヘリコプターが飛び回るようになった。消火活動の大型ヘリも飛んでいる。9:30頃から我が家の周囲にもヘリコプターが接近し、消防署、役場周辺でのピックアップを含めた救助が始まっていた。

10:32 我が家の屋上に航空自衛隊員が降下してきた。農協職員の若者が隊員に声をかけられ救助活動に協力することになった。最初に吊り上げられたのは母であった。

結局2機のヘリコプターによって全員無事に、寺野ふれあい運動公園野球場に降り立った。この野球場がヘリポートとなり、さらに周囲に救急車、消防車、各地からのDMAT(Disaster Medical Assistance Team 災害派遣医療チーム)、自衛隊が展開していた。すぐに私の医療活動が始まった。

医療行為というよりは、患者の状態に合わせた搬送先を決めるのが初動であった。妊婦、透析患者が優先された。さらに避難所では生活できないと考えられる高齢者を、特別養護老人ホーム、老人保健施設、身体障がい者支援施設へ搬送した。この避難所には重症者はほとんどいなかったのである。私自身も夕方には2名の血液透析患者に付き添いヘリコプターで三沢基地に搬送し、さらに航空自衛隊救急車に同乗し、停電のため対応困難な三沢市立病院を経て、八戸赤十字病院に無事収容することができた。そして同病院のご好意で当直室に泊めていただいた。院長である瀬尾喜久雄先生は、岩手県立大槌病院の岩田千尋先生をよくご存じであった。医局テレビには震災の報道が流れていたが、その場にいない自分に違和感を感じていた。

18:10 町営野球場離陸。

19:07 三沢飛行場着陸。

19:35 三沢市立病院着。停電のため透析受け入れ不可能。

19:40 同院発。

20:30 八戸赤十字病院着。

#### ◇3月13日(日)

5時20分起床。昨晚は寝たり起きたりで過ごした。まず院内の電話で長女、そして東京の友人に無事を伝えた。タクシー会社直通の電話もあり、行き先を告げたとこ行けるところまでは行ってくれるという。ありがたい。三八五タクシー、運転手は藤田 弘さん。

45号線を南下したが野田村で通行不能となった。いったん山道に入り、45号線に戻ったが田野畑村にて通過不能。再び山道に入り岩泉へ抜け、340号線に入った。そして新里村を經由し106号線に入り、土坂峠から大槌に帰還することができた。寺野へ向かう町道の両脇は押しのけられた瓦礫の壁に囲まれていた。

弓道場の避難所に帰ってすぐに妻から渡されたメモがある。大槌病院副院長黒田 継久医師からだった。

“黒田です 大槌病院は薬局が水没し、今は薬がありません。釜石病院に取りにいきます。大槌病院は機能できないので解散予定です。ぼくはボランティアで町に残りたいと思います。岩田先生、佐藤先生も元気です。”



私はすぐに自分の役割を理解した。この弓道場避難所に留まり、自分でできることをやってみようと考えたのだ。スタッフもいる。そして弓道場の一角に会議用の長い机を並べ救護所とした。ベッドなし、椅子なし、点滴ができるようなスペースもなく、手元にあるのは往診鞆の中の血圧計、聴診器、血液ガスモニター、必要最小限の各種救急薬品と消毒薬、包帯と、AEDが1台であった。

また大槌の医療体制は県立大槌病院、6名の医科開業医、6名の歯科開業医、調剤薬局はすべて被災し診療投薬不能であった。この時点での救急隊、口コミから知りえた情報から医療の機能を整理した。

1. 大槌病院：入院患者20～30名で閉鎖状態。黒田医師手紙によると薬もない。電気もなく病院機能は維持できない。患者の転院先を考えているが結論がでない。
2. 城山体育館(中央公民館)：災害対策本部が設置しており、藤井 敏司 医師、佐々木 達哉 医師、藤丸 潔 医師がいる。
3. 四季の里(身体障がい者支援施設)：道又 衛 医師がいる。避難所生活困難者を受け入れていたが、避難者が増加し受け入れの余裕がなくなってきた。毛布等の不足もある。
4. ケアプラザおおつち(老人保健施設)：赤羽 照雄 医師がいる。患者を受け入れてくれている。
5. 寺野弓道場：野球場がヘリポートとなり、妊婦、透析患者の転院や、孤立地よりの移送が多い。このため救急車の出入りが多く、この救急車にお願いする移送も多い。
6. せいてつ記念病院：透析可能とのこと。
7. 県立釜石病院：機能していることが判明。しかしヘリコプター搬送もあり患者が増加している。廊下にまで入院している状態で、軽症者は甲子小の体育館で対応している。他県よりの医師、DMATが入っているようだ。通院者の受診も多く、投薬は2日間分のみ。(一部誤報があった。廊下までベッドを入れ対応しているように思えたが、実際は病棟の耐震に問題があり、入院患者が廊下に避難した状況であった。)
8. 大槌町ディサービスセンター「はまぎく」(社会福祉協議会)：小規模多機能施設「ほっと大町」利用者を含む30名程が入所している。ケアプラザ

より食事が提供されている。

#### 9. 大槌高校：2名の看護師で避難者に対応している。

このような状態にあることを整理できたが、お互いの連絡は不可能であった。

また開設当初はあまり必要性を感じなかった救護所だったが、徐々に患者が増加してきた。多くは持参できなかった慢性疾患の薬を求めてくるのである。特に高血圧症患者の不安は大きい。しかし薬はなく、血圧を測り安静で過ごすようにとお話するしかないのだ。薬に余裕がある高血圧症患者から融通していただいたこともあった。うつ病患者の異常行動、腰痛、腹痛、立ち上がれないというお年寄りなど、多くの患者に対応しなければならなかった。

05:38 八戸赤十字病院発

10:05 土坂峠に入る

10:55 大槌着

#### ◇3月14日(月)

昨夜は余震、時々受診患者があったがけっこう眠れた。7時過ぎには救急車が動き始めたので、血液透析患者1名をせいてつ記念病院へ、左下腿骨折の患者、妊娠5か月の役場職員を県立釜石病院へ搬送予定とし救急隊にお願いした。徐々にいろいろな情報が入る。知人・友人の死。また片岸の堤防がなくなり、JR線路も消失しているという。

07:45 朝食。パン1人1本のみが配布された。

09:05 避難者名簿ができ回覧されている。同時にご遺体確認のための安置所等の説明があった。

13:50 城山の火災が大ヶ口側に回ったという。山林火災が拡大しているのだろうか。またダウン症の女性が過換気症状を繰り返すため四季の里に転送した。DMATチームが大槌町に到着し大槌高校にチーム本部を設置したらしい。各避難所を回るというがいまだに到着しない。

14:40 「4日間も薬を飲んでいない。」と訴える患者が多い。血圧を測定し安静を告げるが、そうもいかないという。ワーファリン、パナル



ジン、ジゴキシンといった種類の薬も不足している。

- 17:30 毛布の配布始まる。被災後のヘリコプター、救急車、自家用車を利用した、透析患者、妊婦、外傷患者(下腿骨折1名のみ)、脱水患者、高齢者の施設への搬送はほぼ終了したようだ。今後はこの避難所環境に対する適応能力があるかどうかの問題である。弓道場床の大部分が土だからだ。
- 18:40 依然余震と津浪警報がある。死亡者1万人以上との報道があったようだ。
- 18:53 仙人大橋が落ちたとのこと。
- 19:25 おむつ、生理用品、ゴミ袋が必要。
- 19:35 四季の里より呼吸不全の患者を、職員が伴い搬送してきたが呼吸状態が悪く、周囲に救急隊もいなかったため、施設の車で県立釜石病院を受診させた。
- 20:05 やはり血圧の薬を求めて受診。釜石、盛岡の病院に行きたいがガソリンがなく困っているという。

#### ◇3月15日(火)

- 01:20 以前より当院に通院していた高齢者が家族に付き添われ訪ねてきた。眠らない、変なことを言うという。「外に与太者がいる。」「襲われる。」と繰り返していた。認知症を発症していた。このような患者が他の施設にも増加しているのであろうか。
- 04:21 比較的大きな余震があった。起き出す人が増えてきた。昨晚から毛布が1枚増えたため寒さはそれほどではなかった。しかし隙間からの冷気は感じた。さて内陸部での患者の受け入れは可能なのだろうか。電気はどうなっているのだろうか。ここでは軽症の患者(脱水症、上気道炎さえも)対応が難しい状態である。また慢性疾患の投薬にも対応できない。調剤薬局の出張は可能だろうか。可能であっても投薬のデータはあるのか。薬があればこの状況でも多少は不安感も軽減されるだろう。しかしここには高血圧症、糖尿病、心不全、膠原病に対するステロイド剤もない。
- 05:25 被災より4日目。不謹慎かもしれないが充実した日々を送っている。

究極の不便の中、医療も日常も…、そんな中で精一杯思考し、行動している。そんな自分を感じている。けっして時間に追われる日々ではない。どのようにして時間を有効に使い、行動するのかを考える日々である。徐々に環境にも慣れてきて、余裕も(?ないのに)出てきた感じもある。

- 06:30 大槌高校避難中の大槌病院入院患者20名余りを、ヘリコプター搬送か地上搬送を予定しており、この交渉のため大槌高校に向かうと友人の消防職員が告げに来てくれた。
- 07:00 ラジオ体操を大槌保育園のFさんの指導で行った。(以後弓道場避難所の日課になった。)すぐに搬送者があった。大ヶ口多目的集会場に避難していた男性で、四季の里通所歴もあり、さらに主治医も道又先生であるため当院職員の車で四季の里へ搬送とした。
- 08:35 I型糖尿病患者の父が来所。インスリンが無いというのだ。しかしここでは確保できず。釜石病院での相談を勧めた。それにしても大槌の災害医療体制は確立できない。残存できた医療機関があれば対応は可能だったであろう。「拠点」がない。とにかく薬がない。
- 09:10 大槌高校では岩田院長・黒田医師・看護師10数名にて大槌病院入院患者20名程に対応している。城山中央公民館との連絡はなかなか取れない。
- 09:40 四季の里に避難していた道又先生奥様の下肢の腫脹がひどく、当院職員自家用車にて釜石病院へ搬送した。とにかく薬切れの相談が相次ぐ。釜石、遠野に行けば手に入るのか。せいてつ記念病院、釜石病院受診すれば出していただけるのか。調剤薬局に聞けば対応できるのか。医療チームはどこなのか。薬は持参しているのか。どのように利用できるのか。このように被災者数が多く、そして被災があまりに急すぎて、着の身着のままの脱出のため薬の準備は無理だったのであろう。
- 11:40 釜石保健所より薬が届いた。降圧剤3種、計340錠、安定剤1種、100錠、睡眠剤2種、計150錠である。さっそく避難所での配布可能の放送を行った。その後避難所内で狭心症の既往歴のある意識障害、冷汗、血圧低下したショック患者があり、血管確保、ニトロ



グリセリン舌下、ボスミン点滴にて釜石病院へ搬送した。この時の救急車は大阪市岸和田所属だった。

- 14:25 釜石医師会、川崎事務長来所。釜石地区の小泉会長、堀副会長は検案に出ている。湊 浩満先生は不明。鶴住居地区の浜登 文寿先生は旧釜石第一中学校で診療中。渥美先生ご夫妻は行方不明。釜石市内は大渡橋まで通行可能である。3月5日に開通した三陸道路がなかったら、釜石とは寸断されていたと思った。またせいてつ記念病院、釜石病院、遠野病院が機能していることも確認できた。
- 15:25 この時点での大槌での医療は不可能。救護所として点滴など、積極的な対応は不可能である。要医療、要医薬はすべて釜石地区にお願いすることになるだろう。新たな薬局、薬剤師の配置、器材、物品などかなり無理だ。冷静に考えれば分かるようなことが整理できていなかった。しかしこの持ち場を離れられない状態である。
- 17:50 滝沢で内科医院を開業している弟が、遠野の親戚と一緒に来てくれた。補液、点滴セット、翼状針、シリンジ、各種内服薬、漢方薬など大量の医療物資を届けてくれた。これに加え食糧各種、ケーキまである。下着類もある。とにかくいろいろなのがうれしい。
- 19:55 夕方からの雨がみぞれとなり雪となった。春の大雪になるのか。山火事にはいいのだが。
- 21:10 釜石ファミリークリニックの関 薫先生来所。釜石の状況を聞く。被災時関先生は釜石厚生病院にいた。夜徒歩で釜石のぞみ病院へ到達。ヘドロの中を歩いたという。お子様は釜石小学校へ避難しており無事であった。やはり一般薬、特殊薬などの薬剤が不足しているものの、釜石のぞみ病院前の調剤薬局薬剤師が同病院薬局で活動していることが分かった。釜石にはまだ薬局機能が残っている。この機能を利用するしかないと思った。

#### ◇3月16日(水)

- 03:15 けいれん発作患者あり。内服薬が少ないため回数を減らして飲ませていたようだ。処方の内容も不明。特殊薬も不足している。まだ余震が続いている。
- 06:10 外は雪景色。早めに朝食を摂り、昨日弟より入手した薬の整理をする。その後、患者診察が続き、夕刻には50名以上を数えた。
- 16:10 城山中央公民館に沖縄より医師団が到着。
- 18:25 釜石病院、せいてつ記念病院は患者受け入れ中止となった。遠野市青笹に避難所が開設された。100名程度の受け入れ体制という。
- 20:30 外は風雪となっている。

#### 3月16日のまとめ

1. 被災後の状況は比較的落ち着いてきたが、避難患者各自の内服薬が不足し不安感がある。高齢者が多く多種多様の薬を飲んでいるが、ここには無い。また保険証、お薬手帳もなく、また何を飲んでいるかも自分自身が知らない。対応に苦慮。
2. この避難所は高齢者が多く、あたかも老人介護施設のようだ。
3. 釜石病院、せいてつ記念病院での患者受け入れが不可能となってきた。当救護所への受け入れ要求がやや増加している。受け入れのためベッド2台分のスペースを確保した。本日は脱水症2例に点滴を施行した。
4. 釜石西地区の開業医、調剤薬局は動いているようだ。
5. 薬卸会社も活動している。
6. 救援物資は入るが、毛布、水、ホッカイロなどで食糧関係は十分でない。本日リングが届いた。
7. 昨日より受診患者が多くなっている。移動がやさしくなってきたためか。
8. 我が家には近づけず。
9. ご遺体の増加。
10. 長崎大学チームが来所予定である。
11. 当救護所には現在400名程の避難者がいる。(被災後の最大人数800名程)



#### ◇3月17日(木)

昨夜もやはり小児の発熱などで2、3時間ごとに起きる状態。昨日入所してきた3名の高齢者と、入所時より気になっていた老人の4名を避難所生活困難と考え、「ケアプラザおおつち」に紹介した。

- 07:45 「ケアプラザおおつち」より男性2名の受け入れ可能との返事あり。
- 09:30 釜石の薬卸会社より降圧剤400錠が入った。釜石高校体育館に救護所が開設された。
- 11:00 遠野青笹の収容施設に39名が移動した。
- 16:40 風雪となり、冷え込んできた。
- 19:30 大槌高校避難所より10か月の幼児。発熱にて来所。
- 20:00 吐き気、めまいの女性来所。

今日妻らが自宅に入ることができた。瓦礫伝いに2階から入ったようだ。寝袋が手に入った。今日から熟睡できそうである。患者は減っているように思ったが、78名を数えた。

#### ◇3月18日(木)

- 06:10 雲一つない青空。野球場側のトイレに行くと、駐車場に自衛隊の車両がいっぱいである。北海道からの部隊という。たのもしい。
- 09:30 医療支援に来ていただいた長崎大学、市川 辰樹先生(長崎大学病院消化器内科准教授)、同大 江口 克之先生(現首都大学東京都市教養学部准教授)と伴に診療を開始した。途中沖縄から訪れた大城 七子看護師も診療に参加した。この長崎大学による寺野弓道場救護所に対する医療支援は、3月16日に大槌入りした同大熱帯医学研究所 山本 太郎教授のご判断により決定された。この日からの安堵感は忘れられない。なにかが終わった感覚だった。

#### ◇おわりに

平成の三陸大津波に遭遇しましたが運よく生き残り、翌日自宅4階屋上から自衛隊のヘリコプターで救出されました。そして降り立った寺野ふれあい運動公園の弓道場に設けられた避難所で、従業員・家族と共に救護所を設けました。これは町民の一人として、自分にできることをしただけだと思っています。避難所では皆そうでした。水汲み、薪運び、食事の用意など、お互いを気遣いながらの避難所生活でした。

また救護所は当初究極の薬不足でしたが、3月14日に釜石保健所から薬品が届き、その後多くの医療支援が続き、さらに薬品流通も復活しました。救護所での診療は机を並べただけのスペースで行い、食事等の生活区間と同居していました。3月18日からは長崎大学の医療支援チームが入り、分担して診察することができました。3月29日に長崎大チームが撤収後、3月30日よりAMDA (Association of Medical Doctors of Asia アジア医師連絡協議会・特定非営利活動法人アムダ) チーム、4月18日より大阪 JMAT (Japan Medical Association Team) チームの医療支援が5月31日まで継続され、同日救護所も閉鎖されました。このように多くの医療支援のおかげで、寺野弓道場避難所救護所の役割を果たすことができたと思っています。

私は6月1日より県立大槌病院仮設診療所に勤務し、7月1日より縁があつて寺野弓道場近くに土地を借り、プレハブの仮設医院での保険診療を再開しました。さらに12月19日より、同じ敷地内に岩手県による「仮設診療所事業」の補助を受け、震災前と同様な検査機器を用意した仮設医院を開設することができ現在に至っています。

周囲ではあの日の記憶が忘れられつつあると言います。しかし私にとっては今後一生続く事実です。できれば体験したくなかった事実でした。そしてたくさんの人々に助けられました。多くの出会いがありました。この事実を写真と文章で残すことが、この震災の私の総括だと考えていました。2年以上の時間を要してしまいましたが、やっと形になりました。

最後に、これまでご支援いただいた全国の皆様へ心からの感謝と、現在でも岩手JMATによる被災地医療支援を続けている岩手県医師会に敬意と感謝を申し上げます。そして震災後も確認できた、釜石医師会の連携を誇りに思っています。ありがとうございました。

平成25年10月吉日

植田 俊郎



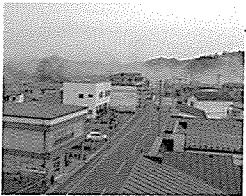
本編写真解説



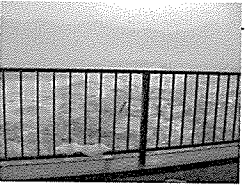
本編写真解説



表紙カバー 7.17/2011  
小鯨山(458m)からの大槌市街地。木造家屋は津波により破壊・流失し瓦礫化した。瓦礫撤去、鉄筋・鉄骨構造だった家屋も撤去が進み、さらに基礎解体工事へ移行している。ここにあった大槌の街と人々の生活を思い出すことが難しいときがある。



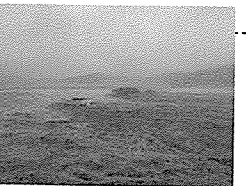
【01】 3.11/2011 15:21:7  
家々を破壊し、襲いかかるように迫る大津波。妻 美智子が大町の自宅4階から撮影。津波第2波と思われる。左手前から松村宅、小松歯科医院、菊千代酒店、小国石油、3階建てアパート、奥に小籠川水門。



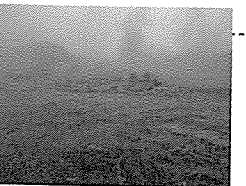
【02】 15:21:7  
4階ベランダからの光景。目の前に波が見える。津波は自宅3階にまで達した。美智子撮影。



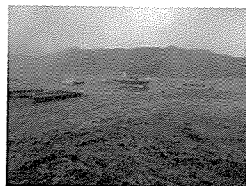
【03】 15:22:02  
屋上に向かう階段より南方向。黒い波が向かってくる。左後方は新よし旅館の3階部分。



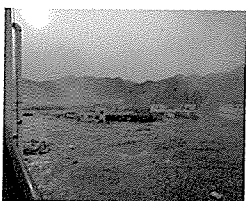
【04】 15:22:32  
屋上からの信じがたい光景。小松歯科医院の2階部分、アパート3階部分、水門が見えるのみで、すべてが黒い海の下である。



【05】 15:22:48  
御社地方向の町並みが水没している。ふれあい交流センターと、左にビジネスホテル「寿」が土煙の中に見える。



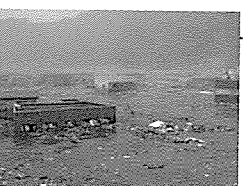
【06】 15:23:08  
役場方向。左から及川宅3階部分、図書館屋上、荒谷タイル店3階部分、カネマン会館3階部分が見える。そして黒く渦巻く海がある。



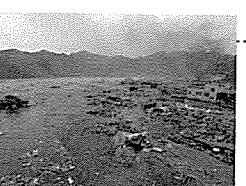
【07】 15:23:38  
藤井小児科内科クリニックと本町方向。右はビジネスホテル「寿」。周囲の2階建て家屋はない。上町方向に煙が見える。



【08】 15:24:18  
大町の消防会館の上部と安渡方向。火災の発生と大槌川の護岸堤防が水没している状況がわかる。



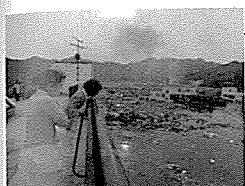
【09】 15:24:44  
左手前は図書館。右奥に役場庁舎が見える。加藤宏暉町長を含む40名の役場職員が犠牲になった。



【10】 15:25:50  
破壊された町の構造物が流れる海。あらゆるものが流れて行く。



【11】 15:25:32  
4階屋上に18名が避難できた。周囲の状況に対する皆の思いは計り知れない。



【12】 15:31:12  
周囲は瓦礫が漂う黒い海。我々は孤立した。



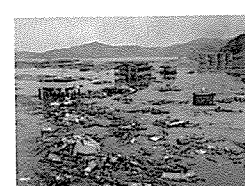
【13】 15:31:50  
瓦礫が燃えて流れてきた。藤井小児科内科クリニックの皆が屋上に避難しているのが見える。右奥は大槌小学校。この後、火が校舎一部に燃え移った。現在は修復され、役場仮設庁舎として使用している。



【14】 15:33:22  
御社地・末広町方向。奥の火災は蓮乗寺(法華寺)だった。この寺の右が岩手県立大槌病院である。



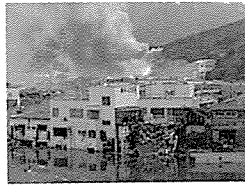
【15】 15:51:22  
右の小籠川水門から帯状に見える黒い波は、津波第3波と思われる。



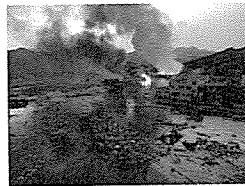
【16】 16:07:22  
瓦礫とともに津波が引いていく。大槌消防署庁舎屋根に避難した職員が観測した津波は13波を数えた。



【17】 【18】  
「私たちがダメかもしれないね。」と母がつぶやく。私は水門から延びる黒い帯状の波を見ている。美智子撮影。  
.....  
放心したようにひざまずく農協職員。



【19】 17:17:44  
上町方向に火災が発生している。この火災は、右奥の大槌小学校の一部にも燃え移った。



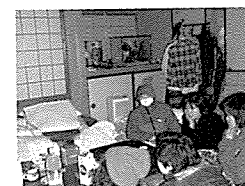
【20】 17:45:26  
本町も燃えている。そして何波目ののだろうか。静かに津波も押し寄せている。



【21】 17:46:24  
山林火災の火の粉が舞っている。雪も降り始めた。この後、寒さによる消耗を避けるため4階和室へ移動した。



【22】 19:34:30  
末広町が炎に包まれている。時々ガスボンベの爆発音が聞こえていた。



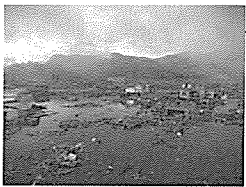
【23】  
4階の和室で一夜を過ごした。衣類・布団類・食糧・飲み物は確保できた。水は冷蔵庫にあった氷を山用ガスコンロで溶かして利用した。





【24】 3.12/2011 05:37:02

生き延びた朝。  
周囲は瓦礫が散在する、静かな湖  
のようだった。  
動くものもない。



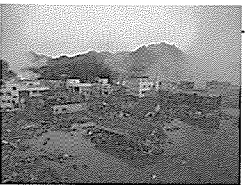
【25】 05:37:18

本町にあった白壁の家が流れ着い  
ていた。  
街はない。



【26】 1.1/2011 <震災前画像>

めずらしく元旦に降った雪を3階  
から撮った。  
写真【25】と比較すれば津波の破壊  
力が理解できる。



【27】 3.12/2011 05:38:30

江岸寺付近も燃えている。  
街がヘドロに覆われている。



【28】 05:40:56

屋上に皆がたたまずむ。  
今後のことは、全く予想できな  
かった。



【29】 05:39:12

上町も燃え続けている。  
ヘドロにまみれた瓦礫が横たわっ  
ている。  
水も引いていない。



【30】 09:17:48

当院職員の車が隣家倉庫の上に  
乗っていた。



【31】 09:29:12

航空自衛隊航空救難団隷下の三沢  
ヘリコプター空輸隊による救出活動  
が始まった。



【32】 10:33:56

空輸隊初のホイスト吊り上げ救出  
だった。(杉山 潔:自衛隊カメラの  
捉えた災害派遣最前線 航空ファン  
No.713:98-102 2011)



【33】 11:37:36

機種はCH-47J(LAタイプ)。  
風圧がすごかった。



【34】 10:45:30

燃料補給を終え2度目の救出の  
ため屋上に降りてくる自衛隊員。



【35】 11:41:42

吊り上げられ収容された  
ヘリコプターの機内にて。



【36】 3.14/2011

大槌町寺野ふれあい運動公園内の  
弓道場に設けられた避難所。



【37】 4.26/2011

長崎大学の主導によりブルーシート  
が敷き詰められた避難所の床。  
各自工夫し、役割を分担し避難所  
生活を過ごしていた。



【38】 3.14/2011

弓道場の片隅に救護所を設置した。  
往診拠点にあった聴診器、血圧計、  
わずかな薬剤とAEDだけの救護所  
である。



【39】 8.8/2011

平成23年8月11日には弓道場を  
含む、大槌町内すべての避難所が  
閉鎖された。



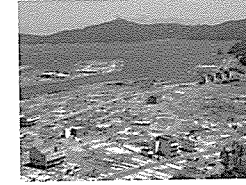
【40】 7.18/2011

夏草が街を覆う。  
ここに生活の匂いはない。



【41】 5.5/2007 <震災前画像>

平成19年5月の連休に友人ご夫妻  
と歩いた城山遊歩道から撮影。



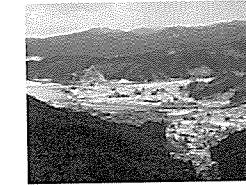
【42】 6.28/2012

残った建物の撤去が進んでいるが、  
歩みは遅い。



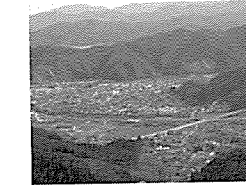
【43】 1.8/2004 <震災前画像>

平成16年、三女の成人式が行われ  
た城山から撮影。  
蓬莱島から延びる防潮堤と大槌川  
そして町並みが見える。



【44】 2.5/2012

雪原が広がる。  
小鯨山より。



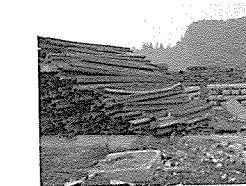
【45】 4.11/2009 <震災前画像>

震災前の町並み。  
小鯨山より。



【46】 5.13/2011

JR大槌駅前にあった道又内科・  
小児科医院。  
院長ご夫妻、叔母様は2階寝室の  
中で、首まで波に没したが生還した。



【47】 7.26/2011

撤去されたレールと枕木。  
JR山田線復旧のめどは、立っ  
ていない。





【48】 5.5/2007 <震災前画像>  
平成19年5月のJR大槌駅前。



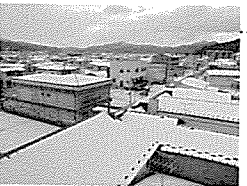
【49】 4.5/2011  
瓦礫に囲まれた我が家。



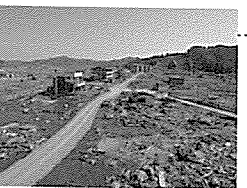
【50】 5.5/2007 <震災前画像>  
こどもの日。  
通りに万国旗を飾り祝った。  
陣屋遊びも懐かしい思い出である。



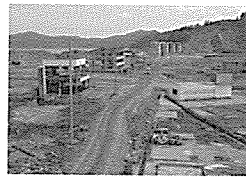
【51】 1.22/2012  
雪が降った日。  
道と家々の土台が現す白黒のコントラストが悲しい。



【52】 1.1/2011 <震災前画像>  
大みそかに降った雪が街を覆った。  
大津波が来る年の元日の朝。



【53】 4.5/2011  
地盤が沈下し、以前の道はかさ上げしなければ通行不可能である。まさに瓦礫に覆われた街である。



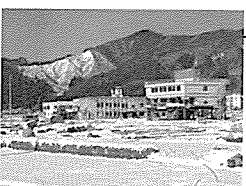
【54】 8.10/2011  
瓦礫撤去が進み、夏草が生い茂った。



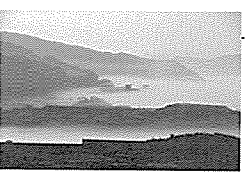
【55】 1.14/2010 <震災前画像>  
静かな雪の日の朝。  
この町並みが失われた。



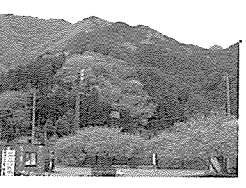
【56】 1.24/2012  
旧大槌町役場。  
保存・撤去で意見が揺れている。



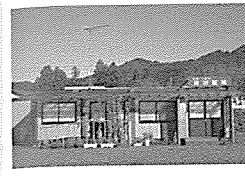
【57】 2.26/2012  
役場庁舎とカネマン会館。  
後方の山は小鯨山(458m)。



【58】 8.7/2011  
山波、大槌川兩岸の瓦礫山と朝もやが幻想的だった。



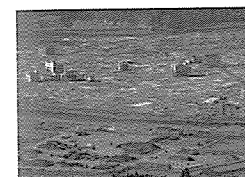
【59】 5.10/2012  
寺野野球場周囲の八重桜。  
新緑も美しい。



【60】 9.7/2011  
平成23年7月1日から仮設医院での保険診療を再開することができた。



【61】 6.26/2011  
蓬萊島。作家・劇作家 井上ひさし氏の「ひよっこりひょうたん島」のモデルとされている。  
津波前は赤浜から防潮堤に沿って徒歩で渡ることができた。右の壊れた灯台は再建されている。



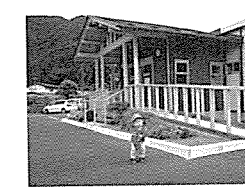
【62】 4.15/2012  
建物の撤去が進んでいる。  
大槌川の手前は瓦礫の分別場である。



【63】 4.21/2011  
津波被害の岩手県立大槌病院3階病室から見た新町方向。  
入院患者53名、職員、近所の住民が屋上に避難した。

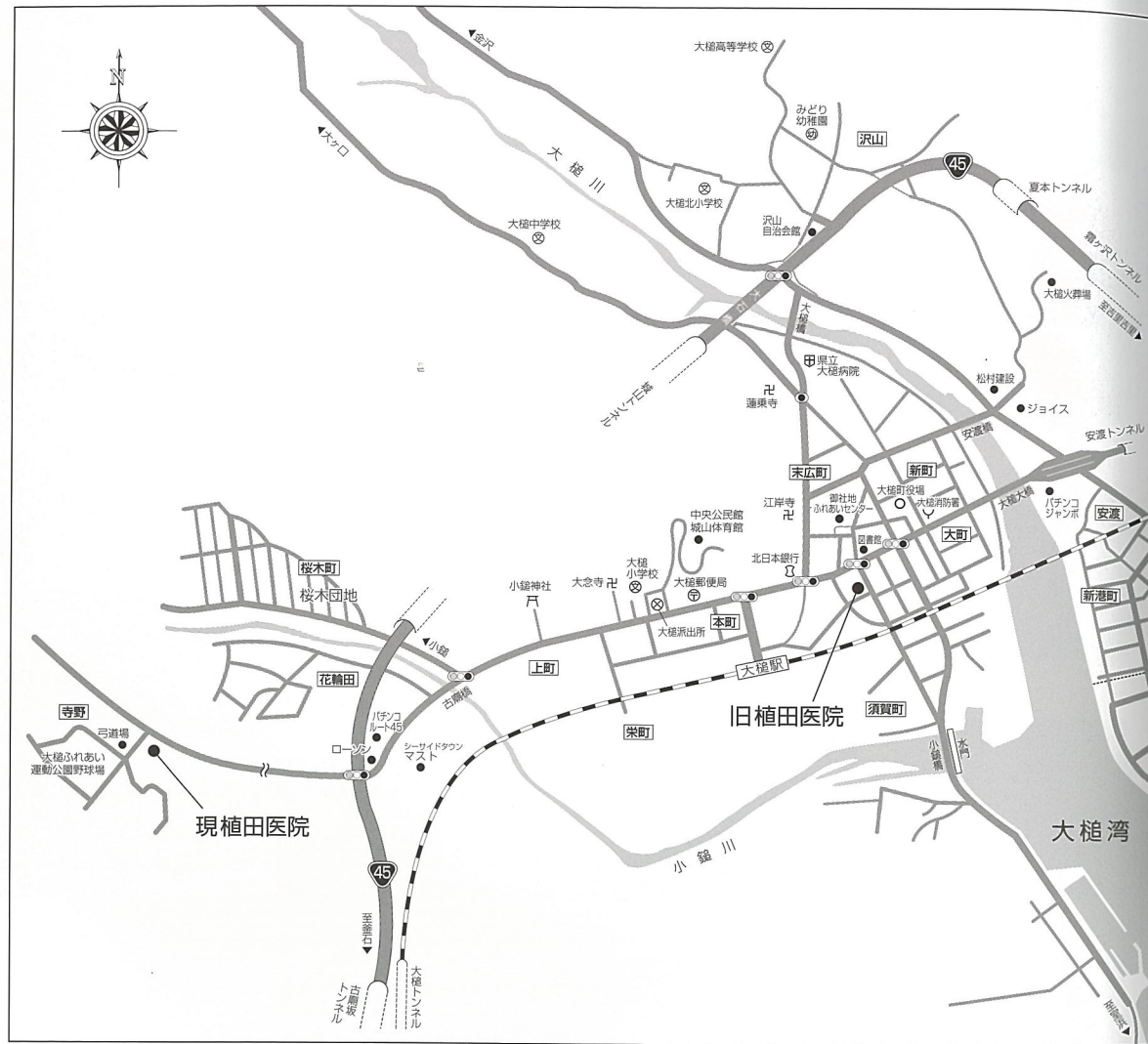


【64】 8.5/2011  
夕暮れの大槌病院。  
常勤医は、岩田千尋 院長、黒田継久 副院長、佐藤大輔 医師の3名だった。  
寺野地区に再建が決まっている。



【65】 7.22/2012  
平成23年4月9日 6時43分、新潟で生まれた初孫の晴。  
出生時体重は2918gだった。  
1歳になった夏に会いに来てくれた。  
仮設医院前で遊んでいる。





震災前の大槌町町方概要図



我々の日常と、思い出という過去が存在した大槌の地に、どのような未来が創造されていくのだろうか。

平成25年3月31日 小鯨山中腹より撮影



## 大槌の津波

その記録、そして出会った人々

2013年10月20日 発行

著者／植田俊郎・植田美智子

編集・レイアウト／蛇口禎治

発行者／植田俊郎

〒028-1121 岩手県上閉伊郡大槌町小槌第23地割字寺野23-1  
TEL 0193-42-2130 FAX 0193-42-7895

印刷・製本／釜石プリント合同会社

©植田俊郎 2013 Printed in Japan